

ルクが下がり、国内物価が上がって実質購買力が削減されるという。いいかたを変えると、金利を上げるほうが景気にも良い影響を与えるのだという。それが本当かどうかは別として、金利引上げ＝景気悪化というこれまでの常識が疑われていることになる。

このような事態を見せつけられると、こちらの頭がおかしくなる。シェイクスピアの悲劇マクベスのなかで、魔女が「きれいは汚い、汚いはきれい」と歌うが、そんな歌を聞かされているような気分になる。どうすればなにが起ころのか、皆目見当がつかない。

これまでの計量経済学などでは、ある行為 X をとると、これに係数 a をかけた aX だけの効果が生じるというように考えられた。この a は確定値ではなく、幅をもって推定された。そういう形で不確実な世界に迫ろうとしてきたわけだ。しかし a の符号がプラスかマイナスかは決まっているものとして取り扱われてきた。符号自体が不安定なことは、困ったことだ。

もっともこれは、関係するのが X という要因だけでなく Y も関係していると考えて解決できるかもしれない。 a が Y の関数として $a(Y)X$ とかけば事態を把握できるというわけだ。たとえば通貨供給はインフレ期待が強いときには金利を上昇させ、弱いときには金利を低下させるというわけだ。

しかし実際には通貨供給自体にインフレ期待をもたらす作用がある。通貨供給がインフレ期待、金利上昇へのチャンネルと、金融緩和、金利低下の両方のチャンネルをもっていて、時に応じて使いわけが、その使いわけが微妙で予測しにくいところが問題である。こういう現象が増えると経済予測はむずかしくなり、経営もやりにくくなるのはいうまでもない。

いまのところ、こうした因果関係のマルチ・チャンネル化が目立っているのは、上の例でもわかるように金融、為替などマネタリーな領域においてである。こうした領域では人々が期待、投機、思惑にもとづいて行動する。エドガー・アラン・ポーの「盗まれた手紙」によると、大事なものは大切に隠してあるだろうと人々は思うから、かえってそこらに放り出しておけば気づかれないですむという。人間心理の裏を読むわけだ。しかしさらにその裏を読まれることを考えると、やっぱり大事に隠したほうがよいことになる。隠すか放り出すか不安定になるわけだ。金融や為替の動きにはこれと同じ質の不安定さがつきまわっているように思えてならない。

確率論的モデルやファジー理論では必ずしも覆いきれない複雑なシステムが世にはびこっている。これをどう取扱うかは、経済学だけではなく多くの学問分野で問題となってくるのではないだろうか。

* * * * *